

<第六章>

教科書を用いた音読・シャドーイング指導（高校）

6.1 英語 I：物語文をもとにストーリー・リテリング

～リード・アンド・ルックアップで表現力を身につける～

6.1.1 授業の要点と流れ

第 1 時の授業の冒頭で、このパートの最後の活動としてストーリー・リテリングを行うことを伝える。読んで十分理解した英語をリード・アンド・ルックアップでしっかり覚え、自分のことばとして表現力豊かにストーリー・リテリングを行う。

※第 1 時・第 2 時の流れについては p. 168 を参照

6.1.2 教材例

pp. 168-169 を参照

6.1.3 指導例

- (1) スキーマの活性化（オーラル・イントロダクション）
- (2) 詳細を問う音声をペースメーカーにした黙読
- (3) フラッシュカードで単語練習
- (4) スラッシュ対訳シートで意味確認
- (5) 音読練習
- (6) リード・アンド・ルックアップの説明と練習(p.44)
- (7) ストーリー・リテリング（ペア練習）

6.2 リーディングを主体とした音読・シャドーイング指導法

～段階的に英問の質を上げて理解を深め音読リレーで競争させる～

6.2.1 授業の要点と流れ

※第 1 時・第 2 時の流れについては p. 174 を参照

6.2.2 教材例

p. 175 を参照

6.2.3 指導例

- (1) 概要を問う英問でリスニング
- (2) 詳細を問う英問と音声をペースメーカーにした黙読
- (3) 語彙の意味を推測させフラッシュカードで単語練習

- (4) 対訳シートで意味確認
- (5) 音読練習
- (6) リレー音読(p.90)の説明
- (7) 理解を深める英問を宿題に
- (8) リレー音読
- (9) 宿題の英問の答え合わせ
- (10) 生徒の感想

6.3 バックワード・デザインによるリーディングとスピーキングの統合

普段の英語 I・II の授業に、英語を使う活動を組み入れることができる。

その際に、スピーキング活動の最終の到達目標として、一段階前に何ができることが必要か、またその前の段階では何を達成しておくべきか、というように最終目標からさかのぼって授業計画を行う Top-down 方式（高橋, 2003）もしくはバックワード・デザインを利用する。（p. 185 図 4 を参照）

6.3.1 授業の流れ・6.3.2 教材例

pp. 186-187 を参照

6.3.3 指導例

pp. 187-193 を参照

6.9 入試長文問題演習における音読・シャドーイング指導

「予習」を前提とした授業は未知語の意味調べ中心で、英文を読むことが従になりやすい。ここでは「入試長文問題のパスセージを用いて読解力を伸ばすとともに、効率よく語彙や構文を身につけ、理解を伴ったリーディング・スピードを作文力の向上させる」ために効果的な指導法について説明する。

6.9.1 入試長文問題を用いた大まかな指導の流れ

(pp.244-256 を参照)

6.9.2 入試長文問題を用いた授業例

(1) 第 1 時

①未習語の語彙指導

(pp.246~248 を参照)

教材の入試長文に出てくる語彙を予習として全て調べさせるのではなく、推測可能な語と調べさせたい語を合わせて 100 語につき 3 語程度、それ以外は語彙リスト(p.248)として与える。

いきなり予習を要求する場合は、前の時間にここで示すような語彙指導を行っておくと、予習では内容理解と推測の練習ができ、入試長文読解問題対策として効果がある。(p.248)

②概要理解

(pp.248~250 を参照)

(2) 第 2 時(第 3 時 : パラグラフ後半について同様に行う)

(pp.250~254 を参照)

パラグラフごとに

③語彙の復習

④内容理解(要点・細部)のチェック

⑤難しい箇所の説明と音読練習

⑥パラグラフ全体の音読練習

を行う。

(3) 第 4 時(次のパッセージの第 1 時)

⑦復習(p.254 を参照)

基礎知識(4)

スキーマとは?

1.スキーマとは?

- ・スキーマ(schema)…読み手が既に備えている知識の構造(knowledge structure)。→経験に基づいて長期記憶に蓄積された情報は体系化(ネットワーク化、階層構造)されて保存される。
これにより、人間の認知活動が効率よく少ない負荷で行えることになるが、逆に先入観に基づく勘違いの原因にもなる。特に異文化間でのコミュニケーションでは理解を妨げる原因となる。

2.内容スキーマ(content schema)と形式スキーマ(formal schema)

- スキーマは内容スキーマと形式スキーマに分けられる。
内容スキーマ…背景知識と呼ばれる一般的な概念体系。
形式スキーマ…レトリック(論理展開の形式など)やテキストのジャンル(ストーリー、説明文など)に関する知識。
- スキーマに関する処理はトップダウン処理(すでに備えている概念体系に入力情報をあてはめ理解する)に属する。
スキーマを用いて既に持っている概念と照合させて、入力する情報を統合させるという読み方が大切である。Ex.「子供に新聞を読ませるとき」

3.スキーマとリーディング

- テキスト表象(心の中で再現されるテキストの意味)を構築する過程)は
 - ①表層構造(単語や句の符号化)
 - ②テキストベース(文章の修辭的な構造の表象)
 - ③状況モデル(テキストから得られた情報を先行知識と統合する)という3段階に分類される。
- テキストを完全に理解するには、テキストに込められた情報と整合性のある状況モデルを構築できなければならない。
→読み手がテキストに対してどのような状況モデルを構築できるのか、またそのためにどのようなテキスト構造をもっているかはテキスト理解の重要な要因となる。
- しかし、背景知識を重要視し過ぎることに注意が必要。
→ある程度の語彙力、文法力が無いと背景知識は読解中に生かせない。
- 現在ではディコーディング処理の自動化が読解中の背景知識の利用を高めると考えられている。ただし、ディコーディング力が上がるからと言ってスキーマ力も上がるとは限らない。
→このことについては、ディコーディング力がある程度ある第二言語学習者の読み手はスキーマの使用に関してどのような問題を抱えているのかについて考える必要がある。

4.指導への示唆

(1)形式スキーマの扱い

(Contrastive Rhetoric Hypothesis)…テキストをどのように構築するかは文化間で異なるという仮説。文化特有の思考パターンに基づきレトリックのパターンも異なり、それが作文にも反映される。

→必ずこの理論通りに文が構成されるというわけではない。

しかし、平均的に利用されるパラグラフの展開方法や論理展開を知ることは普遍的な論理性を育成することになり、そしてこの能力が形式スキーマの習得につながる。

→多くの読解パターンに馴染みを持たせることは、読解力を促進する一つの要因となる。

(2)内容スキーマの扱い

- ・文化特有のスキーマが理解の妨げになる。

→第二言語の文化に特有なスキーマが欠如しているために理解ができない場合、学習者は母語の文化特有のスキーマに基づきテキストを解釈する。

- ・また第一言語であっても論理性や推理力によって読解力に差が生じる。

◎生徒が自ら読みの最中にスキーマをうまく使えるようになるよう指導する必要がある。

また文化的な影響でスキーマ自体が存在しない場合には、文化間の差異を補う思考力を育成する必要がある。

感想・考察

本章では高校における音読指導について紹介した。

高校の授業は中学の授業よりもさらに入試を意識する傾向が強いため、音読指導に費やす時間が少なくなるという問題が生じてしまう。

また生徒たちも音読より入試に直結した学習を望む傾向があるため、彼らに音読の重要性を伝え、納得させなければならない。

高校の指導では音読と入試の関連性を十分に伝える必要があるだろう。